



日韓文化
交流基金

NEWS

No. 52
2009.
12.28

The Japan-Korea Cultural Foundation

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-12-1 虎ノ門ワイコービル3F TEL 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326

<http://www.jkcf.or.jp>

第10回日韓文化交流基金賞



日韓文化交流基金では、文化および芸術分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、毎年1回日韓文化交流基金韓国訪問団レセプションで表彰しています。

第10回（2009年度）の受賞者は、白仁天氏、徐淵昊氏、徐賢燮氏の三氏に決定し、授賞式が9月10日にソウルのロッテホテルで開かれました。

受賞者プロフィール



白仁天 ベク・インチョン
1943年生まれ
SBSメディアネット野球解説委員

日本プロ野球に進出した韓国人選手の草分けとして20年間にわたり活躍され、その後韓国プロ野球の発足とともに帰国し、4球団で監督を歴任されました。日本プロ野球での経験を取り入れ韓国プロ野球の発展に貢献されたほか、テレビ解説者として日本の野球を韓国内に紹介するなど、日韓の野球界の発展と相互交流のため尽力されています。



徐淵昊 ソ・ヨノ
1941年生まれ
韓国芸術総合学校伝統芸術院客員教授、
高麗大学校名誉教授

韓日文化交流政策諮問委員会幹事、日韓/韓日文化交流会議の韓国側事務局長として、1990年代後半より進んだ韓国における日本大衆文化の段階的開放の推進に尽力されました。その結果、韓国の一般国民が日本の大衆文化に接する機会が拡大し、両国の国民レベルの交流、相互理解の進展に大きな功績を残しています。



徐賢燮 ソ・ヒョンソプ
1944年生まれ
長崎県立大学国際情報学部国際交流学科
教授

外交官として、また大学教員として長年にわたり日韓関係の発展に貢献されています。1990年の盧泰愚大統領の訪日時には、大統領のスピーチ草案作りに関り、「朝鮮通信使」や「雨森芳洲」の名を世に広く知らしめました。現在は大学教員として研究・教育活動のほか、講演やシンポジウムなどの活動を活発に行うなど、未来志向的な日韓関係の構築のため尽力されています。

1998年5月、パプアニューギニア大使から福岡に総領事として転任した。蘭学に特別な関心を抱いている者として、福岡赴任は言葉では言い尽くせないほど願ってもないポストであった。今振り返って見ると、3年近く在任した期間は、自分の人生でも楽しくもあり、意味の深い時期であった。

私は幼い時から、3種類の人間に憧れ尊敬してきた。小説家、教授、そして修道僧である。海外勤務をしている時も小説家に会えば、国籍は関係なくお招きして、話を交わすことが大きな喜びであった。福岡でも、詩人で作家である森崎和江先生にお会いでき本当に光栄だと思っている。森崎先生に対する尊敬の思いは言葉では表現できないほどである。また福岡在任中数十名にも及ぶ教授たちと会い、彼らの学問世界の片鱗を垣間見て、大きな知的刺激を受けた。その中でも、杉岡洋一九州大学総長と巡り会えたのは全くの幸運であった。先生の気高い見識と人柄に魅了された。また公邸の午餐や晚餐では枢機卿やお坊様に來ていただき、敬意を表することもできた。

運が良かったのであろう。1998年11月、金鍾泌国務総理が九州大学を公式訪問

し、「韓日関係の過去と未来」という演題で格調高い講演をされた。現職国務総理の九大訪問は前例がないことであり、その上通訳もなしに直接日本語で学生たちに両国関係について説き明かすように話されたので、大きな感動を引き起こした。韓国の国務総理が公式の行事で日本語を使ったのは初めてのことであったが、幸いにも韓国のマスコミは全く問題にしなかった。これは韓国の社会が、成熟してきたことを示す一つの好例であるといえるだろう。

国務総理の訪問を契機として、1999年7月には韓国外交通商部の外郭団体であ

究センターを、韓国学研究としては世界的な研究機関に発展させようという思いを共にしたのだ。海外における韓国学研究機関の支援は、総領事としては当然の責務であった。喜んで最善を尽くしたつもりである。

ありがたいことに、九州大学は韓国研究センター設立に関与した私の功績を記念して、2001年1月、感謝状を下さり、500名に上る学生と先生方の前で「新しい韓日関係を目指して」と題した記念講演を行う機会を与えてくださった。それだけではなかった。同年7月には九州大学から名誉



九州大学韓国研究センターで



九州大学正門で。総領事として福岡に赴任して以来、特別な縁を結んできた。

る「韓国国際交流財団」の李延彬理事長（後に外交通商部長官を歴任）が九州大学を訪問し、九州大学を「韓国研究の拠点」と位置づける、5年間で100万ドルに上る助成を中心とする協定に調印した。これに応じて、九州大学は韓国に関する研究と教育を推進し、九州大学と韓国との学術交流の拠点となる施設として、「九州大学韓国研究センター」を設置することになり、2000年1月に開所式を行った。それは「アジアに開かれた大学」を目指す九州大学の歩みを一層加速させたという。

この一連の過程で、私は杉岡総長と頻繁に接触して、親しい個人的なお付き合いもさせていただいた。九州大学の韓国研

究センターを、韓国学研究としては世界的な研究機関に発展させようという思いを共にしたのだ。海外における韓国学研究機関の支援は、総領事としては当然の責務であった。喜んで最善を尽くしたつもりである。

九州大学を訪問するたびに、韓国研究センターに立ち寄る。短い期間ではあるが、大きな発展を重ねていることに對し、うれしくもあり感謝もしたい。日本側と韓国側の力を合わせ、このセンターが世界的な研究機関として、さらに発展していくことを切に願っている。

当基金の役員からなる「日韓文化交流基金韓国訪問団」が9月9日から12日までの4日間、ソウルと釜山を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする関係者や要人への表敬訪問、見学およびフェローシップ経験者との懇談などを行いました。「日韓文化交流基金賞」授賞式は2日目の釜山団長主催レセプションで行われました。



柳明桓外交通商部長官表敬訪問

日程

9月9日	ソウル到着 重家俊範駐韓大使主催昼食会 李洪九韓日文化交流基金会長主催歓迎晩餐会
9月10日	ソウルジャパンプラブ役員との朝食懇談会 柳明桓外交通商部長官表敬 訪日・訪韓フェローとの昼食懇談会 釜山団長主催レセプション／第10回「日韓文化交流基金賞」授賞式
9月11日	釜山へ移動（KTX 利用） 裴泳吉釜山副市長表敬 釜山港見学・釜山港湾公社訪問 基金フェローシップ経験者との夕食懇談会
9月12日	東西大学校日本研究センター訪問 帰国

参加者

団 長	鮫島 章男	当基金会長、太平洋セメント(株)代表取締役会長
副団長	内田 富夫	当基金理事長
顧 問	戸塚 進也	当基金常任理事、前掛川市長、元衆議院議員
顧 問	竹内 宏	当基金評議員、(財)静岡総合研究機構理事長
顧 問	饗庭 孝典	当基金評議員、東アジア近代史学会副会長
団 員	小山 敬次郎	当基金理事、嘉悦大学産業文化観光総合研究所所長
団 員	檜崎 正博	当基金理事、前関電産業(株)相談役
団 員	梅田 博之	当基金評議員、前麗澤大学学長
団 員	前田 二生	当基金評議員、指揮者
団 員	大竹 洋子	当基金評議員、東京国際女性映画祭ディレクター
団 員	阿部 孝哉	当基金理事・事務局長



東西大学校訪問



選手宣誓をする札幌とソウルの高校生

2009年7月下旬から8月上旬にかけて、「日韓姉妹都市交流ユースカップ」を開催しました。日韓の交流とサッカーを合体させたユニークな大会で、両国の高校生がともに汗を流しながら交流を深めました。

この事業は、「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、韓国直行定期便の就航や姉妹都市提携関係にある5組の地方自治体(参加団体)を対象に、日韓の高校生が相互に相手国を訪問してサッカーを通じて地元で交流し、東京で開催される自治体ごとの混成チームによる総当たりのサッカー大会と、相互訪問プログラムに関するプレゼンテーションと合わせて評価して、総合優勝チームを決定するというものです。



参加団体、相互訪問プログラム

各地方でのプログラムは、7月の韓国訪問からスタートし、8月には日本招聘を行いました。それぞれ訪問先では、学校訪問、合同練習、親善試合などを行って徐々にチーム作りを行い、また合宿やホームステイを通してお互いの結束をいっそう固めました。

● 札幌市 (札幌市内高校生、ソウル市内高校生)

7/25~7/31 ソウル

慶熙高校訪問・合同練習・合宿、見学(ソウルサッカーW杯競技場ほか、水原) 学校訪問



8/3~8/6 札幌

合同練習、学校訪問、ホームステイ、練習試合

● 山梨県 (県立甲府城西高校、忠州商業高校)

7/24~7/30 忠清北道

忠清北道庁表敬訪問、ホームステイ、学校歓迎会・合同練習・友好行事(忠州商業高校)、見学(大田サッカーW杯競技場、水原、ソウル)、親善試合(甲府城西高校・一東高校)

8/3~8/7 山梨

山梨県庁表敬訪問、学校交流(甲府城西高校)、歓迎会、合同練習、友好都市カップ(山梨学院高校)、見学(富士山)、ホームステイ

● 山梨県 (県立甲府工業高校、一東高校)

7/24~7/30 抱川市

友好行事(抱川市長公式歓迎会など)、ホームステイ、合同練習、親善試合(甲府工業高校・一東高校、忠州商業高校)、見学(DMZ、水原サッカーW杯競技場、ソウル)



8/3~8/7 山梨

山梨県立博物館、見学(北杜市内など)、歓迎会、親善試合(荏崎高校)、学校交流(甲府工業高校)、合同練習、ホームステイ

● 雲仙市 (県立小浜高校、求礼高校・全南自然科学高校)

7/27~7/31 求礼郡

ホームステイ、合同練習、見学(求礼郡、臨津閣、ソウル)

8/10~8/12 雲仙

ホームステイ、見学(原爆資料館、雲仙市)、レセプション



● 鹿児島県 (鹿児島県内高校生、全羅北道内高校生)

7/24~7/29 全州市

文化体験、合同練習、ホームステイ、全羅北道庁表敬訪問、見学(ソウル)

8/3~8/7 鹿児島県

鹿児島県庁表敬訪問、合同練習・練習試合、ホームステイ、見学(鹿児島県)



プレゼンテーション・コンテスト

8月7日(金) ホテルメトロポリタンエドモント

参加5チームの総勢150名余りが、7日に東京に集合し、開会式とプレゼンテーション・コンテストが開催されました。

プレゼンテーション・コンテストでは、各チームが相互訪問した交流事業の成果をまとめて、多彩なプレゼンテーションで競い合いました。両国のサッカーW杯競技場視察を通じた考察や、相手国の民族衣装を着るデモンストレーション、相手の言葉で日韓の類似点・差異点の発表を行うパフォーマンスなど、どのチームも趣向を凝らしたものを作り上げてきました。

審査委員長の静岡県立大学・小針進教授からは「若さあふれる率直な感想であり、両国での交流事業を通じた共同作業における成果がよく表れていた」との講評をいただきました。



サッカー大会

8月8日(土)、9日(日) アミノバイタルフィールド(味の素スタジアム第二グラウンド)

次いでサッカーのリーグ戦が開催され、各地から駆け付けた親類、知人などの応援を受けながら、熱戦が繰り広げられました。各チームは日韓混成で編成され、「JENESYS」(東アジア青少年大交流計画)のロゴ入りのユニホームを身にまとい、大会に臨みました。チームごとに日韓の人数配分やフォーメーションに



工夫が見られ、チーム作りと戦術を練った様子が見受けられました。サッカーの試合以外にも、キックスピードや的当てを競うサイドイベントが行われました。

	札幌市	山梨県 (甲府城西・ 忠州商業)	山梨県 (甲府工業・ 一東)	雲仙市	鹿児島県	勝	負	分
札幌市		○	○	○	△	3	0	1
山梨県 (甲府城西・ 忠州商業)	●		△	○	●	1	2	1
山梨県 (甲府工業・ 一東)	●	△		○	△	1	1	2
雲仙市	●	●	●		●	0	4	0
鹿児島県	△	○	△	○		2	0	2

○ = 勝ち ● = 負け △ = 引き分け

表彰式

8月9日(日) ホテルメトロポリタンエドモント

プレゼンテーション・コンテストとサッカー大会の結果、総合優勝は札幌市高校生・ソウル特別市高校生チームに決定しました。表彰式では日韓文化交流基金の鮫島章男会長から札幌・ソウルチームに優勝カップが贈呈されたほか、参加全チームに外務大臣からの賞状が授与されました。その後のレセプション会場ではチームの枠を超えて参加選手同士、健闘をたたえ合う姿が見られました。

今回の交流事業は、日韓両国それぞれ五つの自治体の高校生が相互に相手国を訪問し、交流を深めるとともに、国別対抗で

はなく混成チームを結成して、プレゼンテーションおよびサッカー大会の2種目で対戦するという点で特色のあるものでした。一つの目標に共同で取り組み、一緒に過ごした日々は、参加した日韓の高校生たちにとって、非常に貴重な経験となったようです。



ソウルで第1回「日韓交流おまつり in Seoul」が初めて開催されたのは、「日韓友情年」の2005年。以来、毎年9月にソウルの中心地を日本の伝統色豊かなおまつりの数々が彩る様子は、ソウルの秋の風物詩になりました。2009年には東京で初の「日韓交流おまつり in Tokyo」が開催されることになり、東京とソウルで「つなげようソウルと東京! つなげよう未来へ!」をテーマに、二つのおまつりが同時に行われました。

日韓交流おまつり 2009 in Seoul

期 間: 2009 年 9 月 20 日 (日)

会 場: ソウル広場 (市庁前)

主なプログラム: 両国伝統芸能公演、市民舞踊チーム公演、
日韓同時実況中継 (カンガンスルレ)、
体験交流ゾーン、PR ブースなど

参加団体: 約 30 団体、約 400 ~ 500 名

主 催: 日韓交流おまつり実行委員会

日韓交流おまつり 2009 in Tokyo

期 間: 2009 年 9 月 19 日 (土) ~ 21 日 (月・祝)

会 場: 東京・六本木ヒルズアリーナ

主なプログラム: キムチフェスティバル、パレード、祝賀公演、
両国伝統芸能公演、コンサート、
体験ブースなど

参加団体: 約 23 団体、約 400 名

主 催: 日韓交流おまつり実行委員会

1 日本と韓国の大学生たちがボランティア参加した二つの「おまつり」

当基金が外務省の委託により実施した「日本大学生訪韓研修団 (韓国外交通商部招聘)」と「韓国大学生訪日研修団 (日本外務省招聘)」の団員の大学生たちが、ボランティアとして参加して「おまつり」の盛り上げをお手伝いするとともに、各地の見学や大学生同士の交流・ディスカッションなどを行いました。

(1) 日本大学生訪韓研修団 2009年9月14~23日

今回の日本大学生訪日研修団のメンバーは、ソウルの「おまつり」でボランティア活動を行うのに十分な韓国語能力があることを条件に、選抜されました。

ソウル到着後は、おまつりのボランティア説明会に参加したり、各地の見学や韓国の学生との交流、ホームステイなどを行いました。ソウルの二つの大学では日本語を学ぶ学生との交流に参加し、彼らの堪能な日本語に驚くとともに、積極的に勉強熱心な韓国の学生の姿に大きな感銘を受けていました。また、西大門刑務所歴史館や板門店を印象深い訪問地として挙げる学生が多く見られました。



20日の「おまつり」当日は、朝から会場であるソウル広場 (市庁前) に入り、日韓両国のボランティアが数名で1チームを作り、おそろいのスタッフTシャツを着込んで、会場内で説明や案内、

チラシ配りなどのボランティア活動を行いました。実際に観客に接する中で、クレームに応える経験までした学生もいたようですが、韓国のボランティアと協力して仕事をやり遂げたことで、充実した貴重な経験になったようです。



休憩時間には、「おまつり」のステージを楽しんだり、観客として来た韓国の方や日韓のボランティア同士で文化の違いなどを

- 9/14 事前研修、ソウル到着
- 9/15 オリエンテーション、韓国国際交流財団訪問、講義
日本大使館公報文化院訪問
「日韓交流おまつり」ボランティア説明会
- 9/16 仁川世界都市祭典見学、慶熙大学校日本語学科訪問、
歓迎夕食会 (主催: 慶熙大学校)
- 9/17 板門店、韓国外交通商部 (日韓関係ブリーフィング)、
歓迎夕食会 (主催: 韓国外交通商部)
- 9/18 景福宮、伝統文化体験、高麗大学校日語日文学科訪問
ホームステイ (仁川)
- 9/19 西大門刑務所歴史館見学、「ジャンプ」公演観覧
- 9/20 「日韓交流おまつり 2009 in Seoul」ボランティア
活動、交流会
- 9/21 全州地域見学 (セマングム干潟展示館、韓屋マウル
など)、文化体験
- 9/22 釜山地域見学 (ヌリマル、竜宮寺、チャガルチ市場など)
- 9/23 帰国

日本語と韓国語で語り合うなど、ボランティアをしながら「おまつり」の高揚した雰囲気を心から満喫していたようでした。伝統的な遊びを教え合う様子や、日本のよさこいと韓国のアリランをミックスした「よさこいアリラン」を一緒に踊る姿から、両国の近さを実感する場面もありました。

ソウルでのプログラムの後は、全州と釜山を訪問して全日程を終えました。

(2) 韓国大学生訪日研修団 2009年9月14～23日

9月14日に中部国際空港に到着した一行は、まず名古屋市、岐阜県内、石川県内を訪れ、各地の史跡や古い町並みの見学や地場産業の体験をしました。



その後東京都内に移動し、17日から2日間にわたって日本側学生との交流合宿を行いました。この合宿では、「両国国民間の交流の促進」を主題に、観光、メディア、ポップカルチャーの3グループに分かれて意見交換を行い、2日目に発表を行って、意見の共有と議論の深化を図りました。合宿地では、発表のために各グループが夜遅くまで準備する姿が見られました。

19日と21日は、「日韓交流おまつり2009 in Tokyo」にボランティアとして参加し、ショータイムでのパフォーマンス発表や、会場整理などに参加しました。多くの人でにぎわった会場の六本木ヒルズでは、学生たちのパフォーマンスにも大きな拍手が沸いていました。また、パンフレットの配布や会場の整理を行う学生たちはとても忙しそうに動き回っていました。21日のフィナーレでは、来場者とスタッフが一緒になって、カンガンスルレ(輪にな

って踊る韓国の伝統的な踊り)に興じる様子も見られるなど、学生たちも充実した時間を過ごしていました。



22日には船橋市内と千葉市内を中心に1泊のホームステイを終え、一行は翌23日に無事、帰国の途に着きました。

研修に参加した団員からは、「今まで知らなかった日本の姿を見た気がする。また来てみたい」「「おまつり」参加は、最初どうなるかと不安だったが、貴重な、よい体験になった」「日本の学生との交流は、短い時間だったがとても楽しく、印象深いものだった」という感想が寄せられました。

- 9/14 到着、オリエンテーション
- 9/15 名古屋市内見学(名古屋城、トヨタテクノミュージアム)、郡上八幡見学(郡上八幡博覧館、古い町並み〈水路〉散策、食品サンプル作り体験)
- 9/16 高山・白川郷見学(陣屋朝市、合掌造り民家園) 金沢市内見学(兼六園、ひがし茶屋街)
- 9/17 東京へ移動、講義、日本側学生と対面、歓迎夕食会(主催:外務省)
- 9/18 日本側学生との交流会(グループ別交流会) 韓国大使館および韓国文化院訪問、都内大学キャンパス散策
- 9/19 日本側学生との交流会(グループごとの発表/総括) 「日韓交流おまつり2009 in Tokyo」ボランティア参加
- 9/20 日本科学未来館見学、浅草見学(雷おこし作り体験) 大相撲見学
- 9/21 「日韓交流おまつり2009 in Tokyo」ボランティア参加
- 9/22 東京タワー見学、ホームステイ(千葉市・船橋市)
- 9/23 帰国

2 韓国若手マスコミ関係者招聘事業 2009年9月19日～26日

「日韓交流おまつり2009 in Tokyo」に合わせて、当基金では外務省からの委託により、「韓国若手マスコミ関係者招聘事業」を実施し、「ポップカルチャー」をテーマに韓国の若手の記者・プロデューサー・カメラマン計8名を日本に招聘しました。一行は東京での「おまつり」取材し、開幕パレードやメインイベントの会場で撮影や関係者へのインタビューを行って、番組や記事を作成しました。

また、テーマに合わせて、文化施設の視察や関係者へのインタビューなどを行いました。

参加社: 東亜日報、中央日報、ハンギョレ、DAUM、オーマイニュース、KBS



- 9/19 六本木ヒルズ視察、大相撲見学
- 9/20 三鷹の森ジブリ美術館見学、日韓交流おまつり2009 in Tokyo 開幕パレード・開幕式取材
- 9/21 日韓交流おまつり2009 in Tokyo 取材
- 9/22 京都国際マンガミュージアム、京都アートセンター
- 9/23 裏千家淡交会関根秀治副理事長インタビュー、二条城、古代友禅苑
- 9/24 読売テレビジョン諏訪道彦プロデューサーインタビュー、秋葉原視察、外務省門司健次郎文化交流部長・ポップカルチャー発信使(カワイイ大使) 藤岡静香さんインタビュー、歌舞伎鑑賞
- 9/25 日韓交流おまつり2009 in Tokyo 成田豊実行委員長インタビュー

「明治六年政変」と
研究の視点

明治6年10月に朝鮮への派遣を求めた参議の西郷隆盛が、要求を拒否されて下野した事件は「征韓論」政変と呼ばれ、長く日本近代形成期における重要な外交および政治問題として注目されてきた。1980年代からは、西郷に韓国と開戦する企図があったのか、否かについての論争が展開され、この政変が再び日本史の研究者の間で注目されることになった。

この「研究紹介」は、この論争に分け入ることを課題としているのではない。日韓文化交流基金によって派遣され、韓国での調査を踏まえて、研究課題であった「東アジアにおける国際関係の変容と韓国—北京条約以後の日本の韓国政策を中心に—」という視点からこの問題を分析している経過を報告することが課題である。上記の視点からこの問題を分析するにあたって、次の二つの点に留意した。

第一は、これが「明治六年政変」と表現

するにしろ、「征韓論」政変と表現するにせよ、明治政府の外交政策であった、という点である。この点を踏まえるならば、この時期の外交政策を主導した、外務省、特に外務卿副島種臣の朝鮮政策を解明しなければならない、と考えた。副島もまた、西郷と同様に「明治六年政変」で下野しており、この問題に深く関与した、と推定されている。しかし、副島はこの問題についてほとんど資料を残しておらず、彼がどのように「明治六年政変」に関与していたのかは明確にされてこなかった。この点の解明が、「明治六年政変」の研究を大きく進展させると予想した。

第二は、「明治六年政変」の原因である。西郷が明治維新によって武士の身分を喪失した人たちの活動の場を朝鮮に求めた、というのは通説であり、私もこの点に異論はない。さらに、「明治六年政変」直前の日朝関係は、著しく悪い状況にあり、それが「明治六年政変」の引き金となったと説明されてきた。しかし、近年の日本の研究はこれに否定的であり、私が本フェローシ

ップで派遣され討論した複数の韓国人研究者も、「明治六年政変」以前の日朝関係が著しく悪化した状態には無かった、と理解していた。それならば、なにゆえ「明治六年政変」が、明治6年10月に発生したのであろうか。第二に、この点に留意した。

外務卿副島種臣の
東アジア構想

以上の二点を踏まえて、「明治六年政変」を再検討してみたい。外務卿の副島は、「明治六年政変」後の10月下旬、イギリス公使パークスと会談した。その会談で、副島は豊臣秀吉の朝鮮出兵の失敗の原因を述べている。副島は、秀吉が朝鮮半島の南方から攻め入ったため、朝鮮半島の人たちが北方に逃げるのができた、と指摘した上で、それが秀吉の「朝鮮出兵」の失敗の原因であったと述べている。それでは、副島はどのように「征韓」を行おうと計画していたのであろうか。副島は、パークスに南から攻めるのではなく、朝鮮と中国国境およびロシア国境の二か所から攻め入り、北部から南部に侵攻すべきだ、と構想を述べている。パークスは、ここで朝鮮とロシアの国境から攻め入る案にロシアが賛成するだろうか、と疑問を呈した。副島は、パークスにロシアがこの問題に対して文句を言わない、と明言している。パークスは、副島にこの問題をすでにロシアに提起したのか、と問い質した。副島は、ロシア側に提起していない、と解答している。しかし、これは副島の虚偽である。露日関係史の大家であるフィンベルグ氏の研究を参照すると、副島は、すでに明治5年に在日本のロシア公使にこの問題を提起している。しかし、この提案は、ロシア側に拒否された。ここで問題となるのは、副島が前年に否決されたロシア国境からの進出計画が受け入れられる、と考えた点である。実は、この問題には、清国に駐在していたロシア大使のウランガリーという人物が関係していた。明治



西郷隆盛 吉川弘文館『国史大辞典』第6巻より



副島種臣 吉川弘文館『国史大辞典』第8巻より

6年10月、ウランガリーは清国大使を離任してサンクト・ペテルブルグに帰国する際に、日本に立ち寄った。そこで、副島はウランガリーに対してサハリン島の国境問題の解決に尽力してくれるように求めた。副島は、サハリン島をロシアに譲渡する見返りとして、日本が朝鮮に侵攻する際に、局外中立を保つように提案した。ウランガリーはそれに口頭ではあるが理解を示した。このウランガリーとの約束が、副島に日本の朝鮮への進出に際して、ロシアが文句を言わない、という自信を抱かせる理由になった。

朝鮮を取り巻く 東アジアの国際関係の変容 —ロシア脅威論の高まり—

この問題には、さらに幕末・明治期における東アジアの国際関係の変容が関係し

ていた。東アジアの国際関係の大きな変動は、帝政ロシアと清国によって惹起された。1860年の北京条約によって帝政ロシアは、清国からプリモリーエ（沿海州）を獲得することに成功した。これにより、帝政ロシアと朝鮮は国境を接するようになった。帝政ロシアの東アジアにおける勢力拡大の大きな一歩であった。さらに、1870（明治3）年ころからウラジオストックというロシア極東の拠点的形成されることになる。ロシア極東における軍事拠点であったニコラエフスク・ナ・アムールは、冬季間は結氷するために港湾としての価値は高くなかった。それが、ウラジオストックに移転することでロシアの軍事力が高まると日本側は考えたのである。さらに、この脅威を拡大させたのは、同じく1870（明治3）年に発生した普仏戦争であった。プロシア、すなわち後のドイツとフランスの戦いがなげろロシアの脅威論の拡大と関連するのか、という点が問題である。帝政ロシアは、1853年に開始されたクリミア戦争に敗北して、パリ条約という条約を結ばせられた。この条約で問題だったのは、「黒海中立化条項」といわれる条文であった。帝政ロシアは、この「黒海中立化条項」により、ヨーロッパにおける海軍の拠点であった「黒海」の軍事利用を禁止されてしまうのである。この状況が変化するのが普仏戦争の勃発だった。帝政ロシアの外務大臣ゴルチャコフは、普仏戦争によってヨーロッパが混乱している状

況を好機と捉え「黒海中立化条項」の無効を通告した。この通告は、「ゴルチャコフ回状」と呼ばれる。これにより帝政ロシアはヨーロッパにおける勢力回復の契機を得たのである。

このように1870年頃の日本におけるロシア脅威論は、とても強いものになっていた。日本は、この帝政ロシアの影響力が朝鮮に及ぶことを懸念した。とりわけ外務省の強硬派は、朝鮮半島が帝政ロシアの影響下に置かれれば、日本は帝政ロシアの領土に挟まれてしまう、と懸念したのである。すなわち、北はサハリン島であり、南は朝鮮半島である。副島は、すでにサハリン島の回復に懐疑的だったので、サハリン島を捨てて朝鮮半島を確保する、と構想していたのである。そしてこの構想の実現の可能性が生まれたのが清国大使を退任したウランガリーとの日本における会談だったのである。

このような東アジアにおける国際関係の変動、主要には露清関係の変容・帝政ロシアのプリモリーエ（沿海州）獲得・が近代日本における日本の朝鮮政策を規定することになったのであり、これに加えてウラジオストックの軍事拠点化と普仏戦争による「ゴルチャコフ回状」が「明治六年政変」を惹起した国際的要因だったのである。

PROFILE

麓 慎一

ふもと しんいち



新潟大学人文社会・教育科学系（教育学部）准教授。2009年4月23日から8月19日まで訪韓フェローとして漢陽大学校比較歴史文化研究所において研究。専門は東アジアの国際関係史。

去る7月27日から8月1日まで、現代日本学会に所属する大学院生会員12名と引率者2名で日本を訪問し、お茶の水女子大学と防衛大学校との間で「韓日大学院生共同セミナー」をそれぞれ開きました。

現代日本学会は韓国における日本政治や経済を研究する代表的な学会です。1978年度に創立されて以来、30年余りの間、優れた研究者らがジャーナルを定期的に年2回発行したり、日本に関する研究会を毎月のように開いたりしてきました。『日本政治論』や『日本行政論』など、現在韓国で広く読まれている日本関連研究書を企画・刊行した学会でもあります。こ



お茶の水女子大での韓日大学院生学術交流セミナーを終えて
(7月28日)

の現代日本学会では、日本文学研究を目指している院生らを準会員として受け入れ、彼らが今後も優れた日本文学研究を続けられるように努力してきました。

今年は初めて、準会員による日本研修を企画し日本の院生と韓日共同大学院生セミナーを実施して、より実りのある日本文学の機会を与えたいと思っていました。国防大学校や梨花女子大学校、そして国民大学校の日本に関する研究者を目指す修士や博士課程の院生、合わせて12名が日本研修を希望しました。この事業に対して日韓文化交流基金から「青少年・草の根交流」助成を得ることができたのは、この事業を初めて試みた現代日本学会の幸運でもありました。

計画を推進する上で、日本側のカウンターパートとして、お茶の水女子大学と防衛



防衛大学校での韓日大学院生学術交流セミナーを終えて
(7月29日)

大学校を選びました。お茶の水女子大学は韓国側の梨花女子大学校と姉妹協定を結んでおり、防衛大学校は韓国の国防大学校と学問的交流を望んでいました。準備過程で、お茶の水女子大学の申基榮先生や、防衛大学校の倉田秀也先生には色々ご協力頂きました。

日本に出発する前、韓国の院生は数回会議を開き、発表テーマを調整したり、日本に関する研究を重ねたりしました。初めて日本を訪れる院生が多かったので、希望や緊張をのぞかせていました。

いよいよ7月27日、引率者2名（梨花女子大学校の崔恩鳳先生と私）と院生12名はソウルから飛行機で東京に到着し、六本木にあるホテルに向かいました。翌日28日午前、お茶の水女子大学で申基榮先生の司会で最初の共同セミナーが開催されました。韓国からは梨花女子大学校と国民大学校の院生が中心となった6名がお茶の水女子大学の院生6名と日本語と英語を交えながら、おのおの研究テーマを発表しました。韓国の院生が日中関係や日米関係、日本での韓流などを取り上げたのに対して、日本の院生は男女共同参画や自衛隊の中でのジェンダーなどを発表したのが印象的でした。セミナーが終わって昼食を取りながら、両国の学生が抱えている関心事項について互いに意見を交わす機会を得ました。

7月29日、韓国側の参加者は貸し切りバ

スに乗って、横須賀にある防衛大学校を訪れました。防衛大学校では、韓国からの訪問団に対する関心が高いようで、現役の自衛隊教官を含めた先生5名と学生12名が会場に集まっていました。防衛大学校でのセミナーでは、韓国の国防大学校や梨花女子大学校の院生4名と日本の院生2名

がおのおののテーマについて日本語で発表し、自由な討論の時間を持ちました。あらかじめ決められた手順によって、最初は北朝鮮を含む東アジアの安全保障情勢について、次に韓国と日本の安保協力の方案について互いの意見を交換しました。セミナーが終わってから防衛大学校側が用意した素晴らしい夕食会に参加し、東京湾を眺めるレストランで日本酒を飲みながら、忌憚ない議論の時間を楽しむことができました。

これら二つの韓日大学院生共同セミナーは、私たちにとても有益な機会であったと信じています。今回の日本研修を通じて、学生たちはより深く日本を理解することができたと思います。彼らがこれから書き上げる研究論文の隅々に生かされるよう期待します。

PROFILE

朴榮濬
パク ヨンジュン



1963年、韓国生まれ。1998年、日韓文化交流基金のフェローシップで渡日。2002年、東京大学で博士号取得。現在、韓国国防大学校教授、現代日本学会総務理事。

01 | 青少年交流事業

訪日団						
団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
韓国高校 (第1、2団)	李漢準 盤浦高等学校校長	50	23	23	9/24～30	大月市立大月短期 大学附属高等学校
	宋順子 紫雲高等学校校長	52	22	26		和歌山県立 星林高等学校

*1 引率含む
*2 生徒のみ

訪韓団						
団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
和歌山県 中学生	大浦俊一 和歌山県教育庁学校教育局 学校指導課 副課長	51	15	31	9/13～19	京院中学校(ソウル)

*1 引率含む
*2 生徒のみ

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
日本教員 訪韓研修団 (第1団)	池田彦男 和歌山県教育庁学校教育局 学校指導課 指導主事	20	13	7	6/23～7/2	開浦中学校(ソウル) 三友初等学校(全北) 象山高等学校(全北)



習字の授業体験(韓国高校生第1、2団)



テコンドー体験(和歌山県中学生)



韓国文化体験(日本教員第1団)

02 | 日中韓青少年交流事業

中国の温家宝総理の提案により2007年から実施されている本事業の第3回目の今年は、7月20日から28日まで韓国で開催され、日本からは当基金が(社)青年海外協力協会に委託して92名の青年が参加しました。「日中韓相互協力のための青年の役割」という総合テーマの下に、「社会参与」「文化交流」「サイバー文化」の三つの分科会に分かれ、ディスカッション、視察、ホームステイなどを行い、友好と相互理解の増進を図りました。

03 | 「日韓高校生交流キャンプ」「日韓学生未来会議」

当基金より(社)日韓経済協会への委託事業である「第13回日韓高校生交流キャンプ」が、7月28日からの4泊5日間、ソウル郊外の龍仁市で開催されました。日韓双方から44名ずつ、88名の高校生が10人前後の日韓混成チームを編成し、事業企画の立案・発表や交流プログラムなどを通じて交流を深めました。また、同じく(社)日韓経済協会への委託事業であり、日韓高校生交流キャンプOBの大学生・高校生が参加する「第4回日韓学生未来会議」も8月3日から4泊5日の日程で釜山で開催され、両国合わせて39名の若者たちが、「雇用」と「ネット文化」をテーマとした議論とそれに基づく政策発表、文化体験などを行いました。

04 | 日韓ガールスカウト交流事業

当基金が(社)ガールスカウト日本連盟へ委託している「日韓ガールスカウト交流事業」が行われました。

今年度は韓国ガールスカウト91名(スカウト79名、指導者12名)が5コースに分かれ、北海道(7月29日～8月5日)、岩手県(7月29日～8月5日)、鳥取県(7月28日～8月4日)、愛媛県(7月28日～8月4日)、宮崎県(7月29日～8月5日)を訪れ、ホームステイや福祉施設訪問、文化体験を通して交流を深めました。

05 | 日韓新時代共同研究プロジェクト合同分科委員会

7月10日(金)～12日(日)、韓国・済州のハイアットリージェンシー済州で、「国際政治」「国際経済」「現在およびこれからの日韓関係」の3分科合同の会議が開催されました。会議では各分科の委員が研究の概要を発表し、今後の研究方針を確認しました。



06 | 維持会員

2009年7月1日～9月30日の期間に、特別会員1名、個人会員21名の方に維持会員制度にご加入いただき、26万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

特別会員 1名

小山 敬次郎

個人会員 21名

浅野 豊美	李 炯 喆	石川 捷 治	井上 和 枝	猪俣 道也
大竹 洋子	神田 外語大学	倉田 秀 也	小林 和 美	芹川 哲世
田代 和 生	鶴 園 裕	中山 隆 夫	中山 めぐみ	並 木 正 芳
林 和 彦	松 井 貞 夫	三 谷 太 一 郎	三 谷 博	尹 光 鳳
渡 邊 武				

07 | 平成22(2010)年度 公募プログラム案内

人物交流助成

2010年度(2010年4月～2011年3月)実施事業に対する人物交流助成の申請を、2010年1月4日から1月29日まで受け付けます。

学術定期刊行物助成

2010年度(2010年4月～2011年3月)の学術定期刊行物助成の申請を、2010年1月18日から1月29日まで受け付けます。

※人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。

人物交流助成および学術定期刊行物出版助成の募集要項・申請書は当基金ウェブサイト
<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。